

力な指針を與えるものと思う。

C₂-1 網代港埋没に関する飛砂の影響について

岩 垣 雄 一

鳥取縣網代港の埋没原因として挙げられるものは、(1) 冬期における飛砂によるもの、(2) 港内に流入する蒲生川の流砂によるもの、(3) 日本海沿岸の著しい漂砂によるもの、なごである。本研究は(1)の港内埋没に関する飛砂の影響をとりあげ、詳細な現地調査の結果を飛砂理論によつて考察して年間の飛砂量を推定するとともに、港内深淺測量の結果なごから港内に堆積した砂の量を計算し、比較検討したものである。港内埋没に大きい影響のある飛砂対策を科學的に樹立する上に、貴重な基礎資料を得ることが出来たが、従来主として農業土木の問題として取扱われて來た飛砂の関係を砂濱地の水理構造物に應用したものであつて、土木工學上の新分野の研究と云えよう。鳥取縣漂砂対策協議會の研究事項として、石原教授指導の下に實施したものである。

C₂-2 九州山口炭積込港灣施設整備計畫概要

河 村 正 新

(1) 九州 山口炭の出炭目標及び綜合輸送計畫

- 1.° 九州炭 イ. 出炭目標 ロ. 綜合輸送計畫 ハ. 各港積出目標
- 2.° 山口炭 イ. 出炭目標 ロ. 綜合輸送計畫 ハ. 各港積出目標

(2) 九州山口炭の積出港灣施設整備計畫(各主要港灣について)

- 1.° 全体計畫 2.° 昭和23年度工事の概要及びその事業効果 3.° 昭和24年度工事計畫

C₂-3 名古屋港の震災復舊工事に就て

鈴 木 誠 一

名古屋港の港灣構造物は、昭和19年12月7日の三河地方の地震と、同21年12月21日の南海地方の地震との再度に亘り、多大の被害があり、破壊箇所の總延長は2萬數千米に達し、港口から堀川の上流に及んだのである。この被害並びに復舊工事の概要を述べると共に、主として柵式岸壁の被害と、その復舊工事に就て述べんとする。

C₂-4 防波堤の構造に就て

比 企 野 廣 治

防波堤の損害は暴風からうけるよりも、之れによる波浪からうけるものが破壊的である。防波堤に

* 京都大學工學部土木工學教室 * 運輸省第四港灣建設部調査課 * 名古屋港務所長
 * * * 名古屋工業專門學校教授

作用する波撃は Cornaglia の定理によれば、底波の影響が著しいものである。碎波や底波は防波堤の前面の海底の状況によつて強く支配される。2つの對蹠的構造である、捨石堤と直立壁堤とを比較して、各自の弱所を考へ、最も耐波性に強い優秀なるものとして、下部に捨石を持つ直立堤をあげた。然しこの設計には波の大きさ、波高、波速の研究資料や、寫眞測量で撮つた波浪についての考察から捨石をどの水深に定めるかが重要な点である。これらについて實例をあげて考察した。

C₂-5 伏木港の浚渫に就いて

福 西 正 男

本論文は小矢部川の水文並に河口浚渫に伴ふ河床移動の模様を論じ、河口伏木港の浚渫工事の概要を述べ且つ其の水深維持の對策に論及したものである。伏木港は富山灣の中樞を占め古來小矢部川の水運を利用して舊庄川の河口に發達した日本海屈指の良港であるが同川からの流下土砂のため河口埋塞せられ僅かに小型船舶の出入し得られる状態であつた。庄川と小矢部川とを分流して以來本港は全く小矢部川の河口港となつた。爾來修築並維持工事の施工を見るに及んで面目一新し、昭和15年には其の取扱貨物量186萬 ton に達した。然るに戦時中港灣施設の酷使及び維持浚渫の放棄のため港内堆積土砂量約200萬 m³ に達し港灣機能著しく低下した。依つて昭和23年度から本格的に之が除却工事に着手し現に工事施工中である。本文では本港の第1期工事から現在に至る浚渫工事の模様を説明し、今後其の水深維持についての對策をのべたものである。

C₂-6 防波堤の防波性能 (第一報)

田 中 清

防波堤の防波性能の一部として、表面波、長波の壁堤による廻折現象を理論的に解析する。波浪の廻折現象も光や音の場合と同じ解析方法が適用出来ることを示し、光の場合の Sommerfeld の解を簡易な Lamb の方法にて説明し、半無限壁堤を廻り込む波浪の浪高は波長の平方根に比例し、堤端よりの距離の平方根に反比例すること及び防波堤の蔭即ち有効水域の限界を決定する。次いで防波堤開口幅、島狀防波堤の長さ等の波浪に對する影響に付ても論及したい。

C₂-7 鋼矢板の腐蝕に就いて

前 川 眞

從來鋼矢板の腐蝕に就いては研究資料少なくその耐久年數について據るべきものがなかつた。偶々昭和23年度岩手縣大船渡港の整備工事に於て昭和6年度修築工事に施工された鋼矢板を引抜くに當り

* 運輸省伏木港工事事務所運輸技官 ** 大阪大學助教授 *** 岩手縣大船渡港務所勤務岩手縣土木部技師